

Title	2.土方巽デジタル・アーカイヴのデザイン理論(I ジエネティック・アーカイヴ・エンジンの方法論,ジエネティック・アーカイヴ・エンジン： デジタルの森で踊る土方巽)
Sub Title	
Author	内田,まほろ(Uchida, Mahoro)
Publisher	
Publication year	2000
Jtitle	Booklet Vol.6, (2000.) ,p.27- 37
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000006-04394201

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2. 土方巽デジタル・アーカイヴのデザイン理論

内 田 まほろ

昨今では世界的なアーカイブームで、今まで埋もれていた様々な資料が整理され、日の目を見る機会が増えている。そのような状況の中で、デジタル・アーカイヴという言葉が定着しつつあることからも言えるように、アーカイヴをデジタル化するという考え方も主流になりつつある。ただ、デジタル・アーカイヴを従来のアーカイヴと混同し、アーカイヴとは何か、デジタル・アーカイヴとは何か？デジタル・アーカイヴとはデジタルな資料のアーカイヴなのか、あるいはアーカイヴのデジタル化なのか、デジタル化する場合の利点や可能性、あるいは問題点は何なのかなどあらゆる定義が曖昧になっている感がある。

そこで本稿では、アート・センターにおける土方巽アーカイヴを具体的な例として挙げながら、資料のデジタル化、サービスとしての提供方法、それらにともなうインターフェースの重要性など、様々な側面から、デジタル・アーカイヴの設計＝システム・デザインについて述べたいと思う。「デジタル」アーカイヴ、すなわちデジタル・データについて考えながら、土方巽アーカイヴの理解へと繋がれば幸いである。

アーカイヴのデジタル化——デジタル・データは天使か悪魔か

デジタル・データの主な特徴を挙げるとすれば、それは、物質として存在しないこと、コピーがいくらでも可能であること、保存、検索が容易なことであろう。データは100万回コピーしたとしても劣化せず、そもそもオリジナルという概念すら危うくするのがデジタル・データの性質である。コンピュータが読み込み可能なデータであれば、現在の技術ですら何百ページにわたるテキスト・データの全文検索はたった数秒で行え、また、物理的に場所をとらないために、大量の資料を保存、蓄積することも可能であり、また、重さのないデジタル・データはある場所からある場所への移動も簡単である。また、ネットワーク上に存在するデータは、どこの誰にとっ

てもアクセス可能である。

アーカイヴをデジタル化するにあたり、これらの特徴は天使か神様のように思える。少し前までの図書館カードやカタログレゾネの閲覧のようなシステムにくらべれば、必要な情報が瞬時に探し出し、そのままテキスト情報をコピーし、自分の手元に保存し、さらに自分の原稿に打ち込み直すこともなく利用できるすばらしいものであろう。もし、ある図書館の本が内容も含めてすべてデジタル化されていれば、本の背表紙のインデックスシールさえ理屈上では必要なくなる。コンピュータを介してその本を読むのであれば、図書館のどの棚にどの本があるかなどということは必要ない情報だからである。物理的に存在しない資料には、番号をふり、住所を定め、整理する必要などないのである。番号やカードの山と格闘することもなければ、コンピュータのハードウェアさえそろえば全く同じ図書館を複数の場所に設置する事も可能である。現状では、この話はあくまで文字データに限ってのことであるが、イメージ・データの解析技術が急速な勢いで進歩していることから、画像であれ映像であれ、文字データと同様に扱えるようになるのは時間の問題である。

ではアーカイヴのデジタル化はすばらしいものなのかな。答えは、簡単にイエスではない。資料をデジタル・データ化することにより、権利、作業、管理など様々な問題点が出てくるからだ。

例えば、土方巽アーカイヴにおける重要な資料の一つは大量の舞台写真であるが、その写真をデジタル・アーカイヴに利用するには様々なハードルを越えなくてはならない。例えば、デジタル化と言った瞬間に拒否する写真家もいれば、ネットワークに載せて公開することに眉をひそめる被写体の方々もいる。資料をデジタル化することにより、いわゆる著作権問題は複雑化する一方であり、それぞれのケースについて、前例を作っていくかなくてはならず、何千枚とある写真、何百人といふ関係者とそれぞれ契約を交わすのは非現実的な話である。いわゆる著作権問題は個人や一団体だけで解決できるものではなく、デジタル・データに対する、社会的なルールや考え方方が整備されるのを待つ必要があるだろう。権利問題は、解決の糸口がなかなか見えない、デジタル化の悪魔的一面である。

「貴重な資料をどんどんデジタル化しましょう。しかしコピーさせてはいけません。高画質で再現性も優れていなくてはいけません。色の再現には特に気を使ってください。最新のフォーマットでお願いしますよ。でも、モニター、プリンターごとに再現される色が違ういますがどうしましょうか？コピー対策にかかる費用は膨大ですが、カバーできますか？最新フォーマットは半年後には変わる可能性もありますが……」

このような煩雜な課題がテキスト以外の貴重資料をデジタル化する際に次々と持ち込まれる。なぜなら、デジタル・データは劣化しないので貴重資料の保存には適している、という一般的な考え方が定着しつつあるからだ。しかし、私は、この考え方には同意しない。デジタル・データが資料の

代価物であるかのような考え方をするから、悪魔としてのデジタル・データが大暴れするのである。貴重資料は貴重資料そのままである。デジタル化されたものはあくまで、デジタルの技術によって新たに作られた資料である。コピーしても全く質の変わらぬテクスト資料や、コンピュータ・グラフィックスの作品など、オリジナル自身もデジタルなものならいざ知らず、オリジナルが絶対的な価値をもつ貴重資料のデジタル化において、その質や権利に神経質になる必要などないではないか。デジタル資料が、物質的なオリジナルと全く同じ質を持つことはない。もちろん、肖像権の問題や、デジタル化権の問題が解決されているわけではないが、新たなデジタル資料を作成したと考えれば、乱暴な言い方ではあるが、その後無限大に起こりうるコピーの問題も無視できるのではないか。さらにアーカイヴにおいて提供する画像の画質を低くすることによって、オリジナルの保護だけでなく、デジタル資料のコピーの回避も可能になるのではないかだろうか。デジタル化は「テクスト以外の貴重資料の複製保存に適している」のであり、貴重資料そのものではない。

元資料の収集保管を行う我々アート・センターは、デジタル化を進めることにより、2種類の資料それを管理しなくてはならなくなつた。アナログ元資料だけなら一度で済む手間が、すべて倍、もしくはそれ以上になつてしまうのである。また、技術の進歩が著しい現時点では、あるフォーマットが別のフォーマットに突然とてかわるという事態が続いており、例えば大量のデータのデジタル化が終点にたどりついた瞬間に、別のフォーマットへ折り返し出発するケースが起こりうる。このような問題はフォーマットだけに限らず、ハード面も同様で、一度システムを組んでも、ハードやOS、インフラストラクチャーが変化すれば、また最初から作り直しである。アナログ一点資料の保存のように、破損や劣化を恐れる必要はないが、フォーマットや管理など細かい問題点が多岐にわたり、またモノとして存在しないからこそ不安定であり、デジタル・データの扱いは非常に複雑で手間がかかるのである。

一方で、社会的な常識やシステムの成長、技術の進歩の安定を待ちながら、天使のデジタル・データをどのくらい理解しアーカイヴに取り入れていけるかが、これからデジタル・アーカイヴの課題であろう。

「触れる資料」と「触れない資料」(デジタル資料とアナログ資料)

土方巽アーカイヴにおいては、元資料の収集、保管を第一の作業にしており、デジタル化というのはあくまで次のステップであると考えている。しかし、デジタル・データの特徴をフルに活用し、検索データベースとしてのデジタル・アーカイヴを充実させるため、できうる限りの資料をデジタル化し、元資料の閲覧を最小限にとどめるように作業を進めている。

記事の内容が読みたいのに、古くて破れそうな雑誌を手でめくる必要はないし、印刷のあせた新聞記事を見る必要はない。しかし、土方の手書き

の手紙は、その内容だけではなく、またコピーだけでもない、あくまで実物に触れたいというのが研究者の欲求であろう。

ある資料の内容情報が欲しいのか、内容ではなくそのもの自体に触れたいのか、我々はこの二つの概念で、資料をカテゴリー分けし、保管、閲覧のルールを決めていく必要がある。

デジタル化され、デジタル・データとしての性質をもった資料は、それだけで元資料にはない質的価値をもつことになる。それは、「デジタル化された新たな資料」であり、何度でも閲覧でき、検索でき、コピーができ、時によっては拡大したり、分割したり、他の資料と混ぜ合わせるような、今までには不可能だった研究を可能にする。触れないデジタル資料は、どのように形を変えても、壊しても、何をしててもよい、どこまでも非感覚的、非感情的な資料である。

逆に、アナログ資料は、その資料の持つ魂をそのまま感じができる、触ることのできる、感覚的な資料なのである。「触れない資料」と「触れる資料」の収集、作成、利用方法に対する姿勢が、デジタル資料を保有するアーカイヴの性格を決めるのである。

ジェネティック・アーカイヴ・エンジンとしてのシステム・デザイン

構造的な設計、視覚的な設計、動作的な設計、そして内容的な設計。これらを統合してアーカイヴのシステム・デザインと呼ぶことにしよう。利用されてこそ価値のあるアーカイヴにおいて、利用時、利用者の使い心地は非常に重要な要素である。非常に価値の高い資料も使い心地しだいで有效地に活用されないこともあれば、ちょっとした資料が大きく研究に貢献することもある。どのようなシステム・デザインによって資料が収集保存され、また提供されるかがアーカイヴの価値を決めていると言っても過言ではないだろう。アーカイヴを、一つの演劇に例えるならば、スタッフ、役者、脚本家、演出家、美術、観客、全てのバランスを考えながら舞台全体のコンセプトを決めていくのが、システム・デザインである。

少し先の未来を考えると、同じデジタル・データを様々な機関で共有するということが起こりうるだろう。そうすると、いろいろな機関のアーカイヴが、最終的に同じデータによって構成されるという事態も十分にありうるわけである。その時、ある機関のアーカイヴの価値はどこにあるのだろうか？筆者は、アーカイヴのシステム・デザインにこそその価値があると考える。研究者にとって必要とされる情報は何か、どのような形で提供したいのか、また、利用者にとって魅力的な情報提供とは何か？ということを考えてデザインされたものに、利用者たちは価値を見いだすのである。役者に命を吹き込むのは脚本や演出であるのと同じように、平坦なデータ（役者）に命を吹き込むのは、資料解釈（脚本）とインターフェース（演出）である。

役者はいろいろな舞台でいろいろな役を演じるが、脚本や演出によって

一つの作品が完成するのと同じであるように、情報は提供され、共有されるモノ、しかし、システム・デザインやインターフェースはアート・センターが保有するモノである。

以上のこととふまえた上で、全体的なコンセプトについての説明の後、具体的な土方巽アーカイヴの役者や観客、具体的な脚本と演出を紹介したい。

我々アート・センターでは、アーカイヴそのものにジェネティックというコンセプトを掲げている。「ジェネティック」すなわち、発生=プロセスというこの概念は、芸術活動における作品の生成過程を意味するとともに、研究者による研究活動も含め、様々な創造行為における過程や、思考、発想のジャンプするさまを意味している。この概念をもとにアーカイヴを構築するにあたり、我々が目指していることは、第一に、芸術家、芸術作品の創造行為、発生・プロセスを重視することである。すなわち作家の年譜、作品レゾネ、クリティックのアーカイヴにとどまらず、その作品自体、作家自身の創造行為に関わる様々なデータを収集、保存することである。第二に、収集保存されたデータで構成されたアーカイヴが、単なる有用な資料の提供という場にとどまらず、利用者への創造的な思考、場として機能することである。そして第三に、継続的なアーカイヴの運営を考え、収集、研究が進むにつれて余儀なくされる書式や定義の変更を前提とした、初期フォーマットに制限されない更新作業を実現していくことである。我々は、過去、現在、未来というレベルより解釈し、それぞれのレベルにおいて、ジェネティックの概念を反映させるという試みを行っている。

ジェネティックなドキュメンテーション（過去）

過去のレベルとは、すでに存在する資料の整理にはじまり、アーカイヴの設計において必要とされる新たな資料を作成する作業である。いわば、これは、ドキュメンテーションの作業に該当する。つまり、資料の収集、保存、作成、それらをデータ化する作業がこのレベルにあたる。現存する資料の解釈や整理方法により、芸術家の作品創造の過程、状況をできる限り再現することが、このレベルにおいて最も重要な課題となる。

土方巽アーカイヴにおけるドキュメンテーションの作業は、形態が多岐にわたる資料を、形態別に分別することからはじめている。また、先行研究にとぼしい土方巽や舞踏に関する基本資料として、総合的な年譜と、それぞれの公演や作品に関する細かいデータを含む、造型作品で言えばカタログレゾネにあたる資料の作成を行っている。また、それらの資料から派生するその他の関係資料の収集、整理も同時進行で行う。我々は、本アーカイヴにおいては、ドキュメンテーション資料の「解釈」と「アーカイヴ全体における位置づけ」を重視している。そこで、資料整理という基本的作業に加え、専門的な研究者の協力を得て、それぞれの資料を丁寧に分析

している。そして研究者の立場からの解釈を総合し、その成果を、各資料データにリンクワードやコメントの付与という形でアーカイヴに反映させている。この過去のレベルの作業における資料解釈の成果が、本アーカイヴの脚本の部分であり、内容的な最大の特徴とも言える。

ジェネティックなアーカイヴサービス（現在）

現在のレベルは、アーカイヴの利用時であり、運営サイドからすれば情報サービスに該当する。我々は利用者にとっての、思考、創造の場としてのアーカイヴ・サービスの提供を目指している。実資料の保存、提供の方法、データベース・プログラムによる情報の提示方法など、利用者が直に触れるアーカイヴとしてのあらゆる側面はすべてこのレベルに該当し、「インターフェース」という言葉に置き換えて解釈し、単なる資料の提供にとどまらない、資料間の連関が作り出す時間的、空間的な感覚を提供する場としてのインターフェース・デザインを心がけているわけである。このインターフェースがアーカイヴの重要な演出要素にあたるだろう。

ジェネティックなアーカイヴ・メンテナンス（未来）

未来のレベルは継続的な運営にあたり、アーカイヴのメンテナンス、特にデータベースの更新作業がこのレベルにおける重要な課題である。このレベルにおいては、アーカイヴの作成自体を一つのアート行為と見なし、運営者、利用者による、双方向でより魅力的なアーカイヴを作り上げていくことを目指し、アーカイヴ自身がジェネティックに成長するというコンセプトのもとに設計を行っている。

アーカイヴ・サービスの開始は、これから舞踏研究にとって影響力の強いものとなるだろう。それゆえ、本アーカイヴ・サービスを利用するこにより生み出された新たな研究成果を、常に本アーカイヴにフィードバックし、アーカイヴ自体の充実、つまりは、舞踏研究全体の水準を高めることに貢献していきたいと考えている。ドキュメンテーションの充実が研究を推進し、その研究がドキュメンテーションを推進していくという双方の「開かれたアーカイヴ」が我々の目指すところである。本アーカイヴは、サービスをはじめるこにより、新たに発見される変更、修正点に対応するため、データベース・プログラムに、予め設計の書き換えを前提とした半構造データモデルを採用している。このモデルにより、基本データの要素やリンクワードを増やしたり、また、必要に応じて、インターフェースや、検索画面のデザインなどを自由に変更できるようになっている。さらに、更新作業が自動的に行われるよう、利用研究者が、資料の新しいリンクワードをコメントという形で付け加えることができる機能を開発中である。

土方巽の資料群＝アーカイヴの役者達

ここで土方巽の資料群について少し述べてみたい。舞踏家、土方巽の資料について述べるということは、同時に、無形芸術のアーカイヴという大きなテーマについて考えるということにもなる。アスベスト館よりアート・センターに委託された資料は、舞台写真を中心に、チラシ、ポスター、チケットなどの画像資料や、ビデオやフィルムの映像資料、そして土方のインタビューや講演記録などの音声資料など、様々な形態のものにより構成されている。また、非常に特徴的なものとしては、様々な絵画や写真を貼り付け、テクストを書き込んだ舞踏譜がある。様々な資料のバリエーションもマルチメディアであるが、舞踏譜のような資料自体がマルチメディア的なものもある。物理的に存在する資料は、それぞれの媒体によって、扱い方も、保存方法も違う。しかし、それらが「デジタル化された新しい資料」となった時、すべてのマルチメディア的な資料は、デジタル資料として統一され、総合的な分析方法を可能にする。

テクスト以外の資料は、各フォーマットの互換性など、様々な問題があるが、新たな研究資料として期待できる分野なのは間違いない、アーカイヴの資料は「デジタル化された新しい資料」として、しばらく収集に終わりを見ることはないだろう。特に、瞬間に消えてしまう無形芸術の分野においては、動きや音といった、従来、保存分析が困難であった資料群こそが、作品の重要な要素であり、デジタル化を積極的に進めることにより、研究の発展が望めることは間違いない。

Produced by , Produced for

——アート・センター印の土方巽アーカイヴとしての観客設定

研究アーカイヴとして始まった土方巽アーカイヴは、その利用者を研究者に絞っている。このことは設計側にとっては非常に作業をしやすい条件である。例えば、自動車だとしたらレーザー用か、オートマ免許者用かによってその機能はずいぶん違うはずである。アーカイヴもどのような知識をもった人たちに向けて資料のドキュメンテーションをしていくのか、また、デジタル・アーカイヴのサービスであれば、どのくらいコンピュータの操作方法に慣れた人、または慣れていない人が使うのかなどの諸条件によって、その設計、デザインが違うのは当然である。アーカイヴは資料をオープンにし、多くの利用者と共有してこそ意味がある。サービスの質、つまり、使い心地を重視しデザインしなくてはならない。

あるアーカイヴにとって、絶対的に残り隠さず関係資料を収集するのは不可能であるし、また、どこまでを関係資料と見なすかという線引きをする必要も出てくるだろう。そのような意味で、我々はアート・センターの製作による、土方巽アーカイヴという姿勢をはっきりと保つことにしている。そうすることにより、収集資料の範囲や種類、資料の解釈、資料の提示方法に対して、大胆な方法を取り入れることができるからだ。このアーティ

カイヴは、曖昧に土方巽アーカイヴという看板を掲げるつもりはなく、土方巽記念アスペクト館からの資料提供、アート・センター製作、編集、演出、運営による、土方巽アーカイヴ、FOR 舞踏研究者。というコンセプトのもとに設計されている。我々は、研究者向けの、アート・センターらしいアーカイヴをデザインすることを目指している。

リンクワードによるアーカイヴの脚本

我々は、各資料を相互に関連づけるため、それぞれのデータに図書館でいうところのキーワードに該当するデータを付与し、これらをリンクワードと読んでいる。リンクワードを決めるに際、我々は、舞踏の世界において汎用性があり、また、資料の関連を充実させ、研究を深める要素としてどのようなものを設定すべきかを考慮した。ある一人の芸術家のアーカイヴ、つまりは、生涯にわたる活動をドキュメンテーション化するため、以下のように資料を分類し、それぞれの観点からリンクワードを作成した。

1：関連作品と参考資料 中心となるのは、当然、作家の作品、活動である。一般的な土方巽の作品と言えば、それは舞踏の公演や公演内の個々の舞踏作品を意味するが、他の多くの芸術家とコラボレーションを行った土方の芸術活動は、舞踏公演だけではとうてい網羅できない。そこで本アーカイヴにおいては、写真の被写体、映画出演、舞踏に関する講義、インタビューなど、様々な彼の活動の全てを作品と見なし、アーカイヴの中心的な資料として分類し、リンクワードとしてのデータを付与した。

そして、その作品の関連資料として、舞台美術や音楽、公演の資料として、ポスターやチケット、公演記録写真、映像などをアーカイヴの対象とし、参考資料という分類で各資料と関連づけている。

2：キーパーソン 土方巽は、文学者、音楽家、画家、デザイナーなど、様々なジャンルの人々と交流し、60年代、70年代の日本のアートシーンにおいて中核的な存在であったことはよく知られている事実である。つまり、土方舞踏を解釈する上で、彼に影響を与えた人物や他の作家の作品は、極めて重要な資料であり、作品発生過程をアーカイヴ化するという意味で欠かせない要素である。さらに、土方の交流関係をアーカイヴ化することにより、カオス的状況であった戦後日本のアートシーンへの新たな視点を提供できるのではないかという期待もある。そこで、我々は、作品資料の分析を中心に、関係する人物を拾い上げ、全資料に対してキーパーソンとしてのリンクワードを付け加えている。

3：キーワード アーカイヴの資料として、研究者たちがもっとも利用したいものは、作品を解釈する文献データであろう。我々は、公演批評、雑誌、新聞記事、論文など土方作品に関するあらゆるテクストを収集することは当然のこととして、それぞれの文献に目を通し、土方舞踏を解釈する上で重要と思われるテクストに注目した。そこから、舞踏を構成する言

葉、例えば踊りのモチーフや、舞踏を解釈する上で重要な言葉を抽出して、キーワードとして各資料へリンクワードを付与している。この作業では、あまりに多くのキーワードが抽出されたため、リンクワードとして使用し、様々な資料に付与されるものと、利用者の研究活動の支援資料としてキーワード辞書のようにまとめるだけのものとに分類されている。

4：キーロケーション 芸術家の活動は活動場所と深い関わりを持つ。そのことから、空間的なドキュメンテーションにも注目し、活動に関係する場所のデータを作成する予定である。

リンクワードが付与された全ての資料は、基本データと共に、それらのリンクワードのリンクとともに提供される。つまり、各資料が提示される時に、その資料の関連作品、キーパーソン、キーワード、参考資料などのリンクワードと常に同時表示されるようになっており、またそれぞれのリンクワード自体相互にリンクされている。

ある作品のデータを見ると、その作品に関する文献、写真などの参考資料、作品を解釈する上で助けとなるキーワード、また、作品に出演したダンサーや、作品へインスピレーションを与えた人物などの情報が同時に提供されるわけである。例えば出演したダンサーへのリンクをたどれば、そのダンサーに関する基本データとともに、作品データと同じように文献、参考資料、キーワードなどのリンクワードが表示されるということになる。

すべてがデジタル化されているために、リンクさせるワードの設定などは制作者の脚本通りに指定すればよい。我々は先に述べたように、ドキュメンテーションの段階から専門家たちを交え研究を重ね、どのような資料の関連づけを行えばよいか検討している。また、運営中に問題が見つかれば、変更を加えればよい。このような方法は、デジタル・アーカイヴであるから可能なのである。

時空間インターフェースとしてのアーカイヴの演出

先に述べたデジタル・データの特徴という話に戻ると、いったん資料をデジタル化すると、膨大なデータをともにかくにも検索し、引っ張ってくるのは理論上可能である。しかし、これに使い心地のよいサービスを加えるとなると、そこには、画面レイアウトの見やすさ、検索機能の使い良さなど、視覚的、動作的な使い心地、言い換えればインターフェースが重要である。

アーカイヴとは、元資料に触れ、利用者の思考や視点を広げ、研究者の活動を助ける場であり、利用者は利用時には、いわばデジタル空間にいることになる。物理的に存在しない、データだけの世界において、どのように空間を演出するか、場を提供するか、これはデジタル・メディア全体における課題である。

他の多くの芸術家との交流、時代背景との深い関わりが指摘される土方

だが、土方に限らず芸術家の研究において、ある作品や活動が彼の生涯の一体どの時期に製作されたものかというのは、極めて重要な情報である。そこで、本アーカイヴでは、各資料が土方の生涯にわたる時間軸の一体どこに位置するのかということを常に意識できるよう、時間軸インターフェースと名づけた演出を試みている。これは、時間情報のある資料を、土方翼の活動開始時期から現在に至るまでのカレンダーと同時に表示し、視覚的に時間を認識できるようにしたものである。基本データとして作成年が表記されているだけではなく、このインターフェースにより利用者は、今自分が閲覧している資料が全体の時間軸上で一体どこに位置するのかを常に確認することができる。

また、閲覧や検索時のデータ入力を、直接文字入力ではなく、一覧表から選択する方法を中心している。なぜなら、文字入力の検索方法は、場や空間を全く無視した方法だからである。芸術家のアーカイヴの利用においては、様々な作品や時代背景を感じながら、資料を閲覧することは経験として重要な要素である。そのような理由から、あるデータへのアクセスを文字入力などの一対一の形で行うではなく、つねにそのデータの周りに位置するものに目をやりながら閲覧するという、従来のアーカイヴのインターフェースをデジタル・アーカイヴにも残している。

リンクワードによる意味的な空間の広がりに加え、時間軸インターフェースや場のインターフェースが組み合わさることにより、本アーカイヴは、デジタル・データの長所を備え、さらに従来のアーカイヴの良さを排除することなく機能する。また、デジタル化された資料は物理的に存在する「触れる資料」や、デジタル化未対応の資料などと対応しており、デジタルの空間から物理的な空間へのつながりを保ち、元資料やデジタル資料によって構成された、新しいアーカイヴ空間を提供することができるのである。

アーカイヴの新機能としてのデジタル・アーカイヴ

これまで、デジタル・アーカイヴについていろいろと述べてきたが、私は、デジタル・アーカイヴとは、従来のアーカイヴの新機能であると考える。

従来のアーカイヴにおいて、資料を見やすいようにスクラップしたり、ファイルにとじたりするのと同じように、アーカイヴをデジタル化することにより、資料全体の利用効率が格段にアップし、また資料保存の面においても助けとなる。さらに、デジタル化という新しい機能は、従来のように元資料の入れ物を入れ替えたり、保存方法を工夫するそれとは違う資料の利用方法を提案し、全く新しい研究成果を期待することができる。また、デジタルであるがゆえに、同様の資料の多角的な提示を可能にし、自由に脚本や役者の性格づけ、空間演出を行えることから、制作側の意図を反映した、個々の仕様にあったような新しいアーカイヴとしての形を提案する。

アーカイヴのデジタル化はまだ始まったばかりである。当然のことなが

ら、デジタル・アーカイヴの手本のようなものは存在しない。アーカイヴの新機能としての理想的なデジタル・アーカイヴは、技術や社会の変化に対応しながら、ここで紹介したジェネティックのコンセプトのように、利用者とともに双方向的に構造を少しずつ変えながら構築されていくだろう。

(うちだ まほろ・慶應義塾大学アート・センター訪問所員／メディア文化論、言語論)